

## 第35回 高橋記念賞受賞者表彰

高橋記念賞は、故高橋愛次氏の功労を記念し、旧社団法人軽金属協会および旧軽金属精錬会を經由して遺族および扶桑軽合金株式会社（現：株式会社アーレステイ）より寄贈された基金によりアルミニウム合金鋳物・ダイカスト製品の製造ならびに関連のある工業技術の進歩発展に寄与した現場技能職を対象に贈られる。高橋記念賞選考委員会（委員長 仲井清眞）の審査を経て、9月26日（水）に開催された一般社団法人軽金属学会第11回理事会において慎重審議の結果、下記のとおり4名の授賞を決定、軽金属学会第123回秋期大会第1日目の11月10日（土）に千葉工業大学において表彰式を挙行政した。

### 受賞者



神山 達也 君  
(古河スカイ株式会社)

### 表彰理由

神山達也君は、1977年に古河アルミニウム工業(株)に入社し、アルミニウムスラブ・ビレットの製造に35年にわたって携わっている。

1994年には、アルミニウム合金の鋳造では最難関と言われている7000系高力合金（Al-Cu-Mg-Zn系）スラブの鋳造技術確立において、鋳造条件の検討から最適鋳型構造設計まで携わり、従前の割れ不良率約3割をほぼゼロにすることに大きく貢献し、その技術を国内同業他社の追随を許さないものにした。その後、同合金スラブの大型化においては、計画の段階から実際の鋳造技術確立まで携わり、早期の鋳造成功に導いた。

1996年には、小ロット・多合金鋳造の歩留・生産性の改善に携わり、同改善に大きく貢献した。小ロット・多合金鋳造を行うと、必然的に、合金切替時の成分変更に伴う不良による歩留の悪化や生産性の低下が課題となるが、炉容量の簡易的な変更など、様々な方法を提案・実現させ、次合金への成分変更を、歩留の悪化と生産性の低下を最小限に行うことを可能にした。

同君は、その経験、知識、指導力を見込まれ、1999年に職場長に就き、自ら改善活動を行うだけでなく、若い人材の育成にも尽力している。

### 受賞者



竹添 義久 君  
(住友軽金属工業株式会社)

### 表彰理由

竹添義久君は、1974年に住友軽金属工業(株)に入社し、38年間一貫してアルミニウム溶解・鋳造にかかわる業務に従事し、現在に至っている。

1992年より大型スラブ鋳造炉の立上げにかかわり、安全、品質、生産、固有技術の発展へ大きく貢献した。新炉は従来に比べて長さ・幅とも約2倍のスラブを鋳造するが、安定して鋳造できる鋳造条件と作業方法の確立に貢献した。また溶解炉の燃焼改善によって溶解時間を短縮し、鋳込み間の段取り作業時間を短縮した。この結果、新炉の生産量は建設時の目標値を70%以上超え、計画を大幅に上回った。これは現場とスタッフ等間接部門の力が結集した結果であるが、竹添君が果たした役割は大きい。

飲料缶用アルミニウムは鋳造時に100ミクロン弱の異物が混入しても液漏れなど不具合の原因となる。竹添君は現場のコンタミ対策（清浄度向上）を徹底的に行い、不具合の減少を達成した。スラブを鋳造する鋳型は歩留向上のため1本ごとに幅を変更できる幅可変鋳型を使用する。この鋳型の実用化に携わり、装置の不具合改善を進めて故障を低減した。また溶湯ろ過技術においてもフィルタ導入にかかわった。

2003年以降は鋳造終了作業を溶湯に近づかずに行える装置改善を行い溶湯災害の危険低減を達成した。同君は現在、管理職として安全、生産管理に従事し、後進への知識、経験、技能の伝承に尽力している。

### 受賞者



藤井 裕喜 君  
(広島アルミニウム工業株式会社)

### 表彰理由

藤井裕喜君は、1984年4月に広島アルミニウム工業(株)に入社し、28年間一貫して、製造に従事、砂型鋳造、LP鋳造、ダイカストの製造技術に携わり、現在は、工場責任者の立場にある。

2005年には800トンシリンダヘッドカバーで金型内部冷却の改善を徹底的に行い、鋳造サイクル26秒を達成させ、優れたハイサイクル鋳造技術の開発を行った。

2007年より製造部長として約200名の大型ダイカスト工場を担当し、鋳造、機械加工、金型保全などダイカスト製造全般にわたり多くの先進的な取組みを推進してきた。現在は、社内の金型保全分科会会長として、ダイカスト部門の金型保全の活動を推進し、金型保全性の改善・標準化に取り組んでいる。さらに、機上型磨き（焼付き）撲滅など、テーマ活動のリーダーとして、製造現場の恒常的な課題に愚直に根気強く取組み、全社7工場の担当者を横断的に改善指導し、生産性、品質の向上に大きな成果を挙げている。

また、わが国の技能従事者の能力向上を図るため、国家技能検定事業である金属溶解（軽合金反射炉溶解作業）、ダイカスト（コールドチャンバダイカスト作業）の技能検定委員および首席技能検定委員を務めてきた。

## 受賞者



和田 修治 君  
(昭和電工堺アルミ  
株式会社)

## 表彰理由

和田修治君は、1973年に昭和アルミニウム(株) (現 昭和電工堺アルミ(株)) に入社、工務課員としてアルミニウム精製(コージュナル法)設備建設と試運転に携わり、その後溶解課へ転籍してからアルミニウム精製設備(2号機, 3号機)の導入・立上げおよび、設備改善など26年にわたりアルミニウム精製設備にかかわる業務に従事してきた。

2号機においては冷却体の冷却能力の向上と精製塊を回収するための装置改善などにより回収効率向上に繋げ、設置当初に対し生産性を2.5倍に向上させた。また精製槽温度調節(制御方法)・管理方法を改善することで精製塊の脱落や溶湯飛散などのトラブルを撲滅し、生産性だけでなく安全面も大幅に改善した。さらに工務課にて培った保全技能、技術を活かして故障解析や設備の改良保全に取り組み、それら蓄積されたノウハウは3号機の設計にも活かされ該設備の早期立上げ、初期トラブル低減に寄与した。

現在は精製ラインの故障削減活動に引続き携わる中で技術伝承を行い設備に強いオペレータの養成に尽力している。